

25回の選考会を終えて

渡辺えり

今回で25回目の選考である。思えば、諸々の仕事に追われる中で、同じ劇作に身を投じる若手のためにと、まさに死ぬ気でやり続けた選考である。そこには関西の演劇人に対する私自身の愛情があったことも確かである。

今回半ばで選考委員を辞することになった理由は後に書くことにする。

棚瀬美幸さんの『赤い靴はいて』は良い意味で女性らしい、今までよりも視点のはっきりした作品で、棚瀬さんの不条理な個性と展開が期待され次作が楽しみな作品になった。認知症になった母親の介護がいかにも大変なものであるか？私自身も認知症の親を持つ身であるので身に染みるし、きれいごとでは済まされない自己との闘いも含めて残酷な現実である。

「お母さんの子供はお姉ちゃんだけじゃない」期せずして同じようなセリフを書いた横山拓也さんの作品もそうであるが、認知症の問題には家族の愛憎が絡んでくるので一筋縄ではいかない。

棚瀬さんの11ページの認知症になって階段に座りたがる様子を「なんで階段なんだろうって、猫じゃあるまいし」「猫？」「猫みたいだと思いませんか？陽当たりのいい静かな場所を陣取るって」…「私も初日、先輩入居者のご家族の方に誘われたんです。『一息ついたら』って。恐らく鬼のような形相だったんでしょうね」「鬼？」「実際、ここに来るまで修羅場続きでしたから」「じゃあ私も」「『ここまできたら落ち着いて良いんですよ』って言われて、私、年甲斐もなく泣いちゃいました」この辺りの会話が、プライドの高い、けれど不器用な女性の感覚を良く捉えていると思った。

山崎彬さんの『毘々』は前回の大賞作品と比べるとこじんまりして思えた。決められたコースを歩かざるを得ないという縛りを誰しもが持っていかざるを得ず、すべてがお釈迦様の手の上での空騒ぎに過ぎないとのメッセージであるならば、山崎さんの今までの破天荒な大宇宙でのバカ騒ぎはどうなるのか？自己の世界をぶち壊して再構築するなら、さらに辛口な手法が必要ではなかったろうか？

横山拓也さんの『肅々と運針』は私は今までの横山さんの作品の中で一番好きな作品だった。自分が神の視点で書きすぎる横山さんが、社会に降りてきた感覚がする。登場人物の内面にきちんと寄り添って書いていると思った。女性に対する思い込みの部分は偏っている部分も感じるが、短命なソメイヨシノをありがたがる日本人のその場主義の皮肉と老人問題と運針を掛けた手法は面白いと感動した。横山さんも「俺も…。俺のお母さんなんだよ」との台詞を書いている。羊水の中の自己。母親の中で保護されたい思いを永遠に持つ、誰しもが子供なのかも知れない。49ページの「私は見張られてんねん」「誰に」「私自身にやんか」この下りは揮っている。凄い台詞だ。いつか私も使わせていただきたい。

橋本匡市さんの『駱駝の骨壺』は私は幼児虐待の話だと思って読んでしまったので、落

語の「らくだ」を底辺に置いた残酷なパロディーとして解釈してしまった。選考の中で「生まれなかった子供のことでないか？」と解釈する作家がいて、そうだとするとガラリと評価は変わってくる。そうなる「骨壺」自体が想念の骨壺になってくる。後半の42ページから泣かせる海のシーンがあるが、その場面も大きく違ってくる。本人に聞いてみたいところである。

中川真一さんの『Round』も力のある個性的な作品である。残酷で切ない話だが、パチンコをやらない私などにはそのゲームの中に取り込まれていく部分が良く分からない。上演した方が鮮烈なイメージになるのかもしれないが、読んでもイメージできる作品にはならないものだろうか？

橋本健司さんの『はつゆき』も他には類をみない個性的な作品である。おぼさんの捉え方がステレオタイプではないかと今回は苦言を呈したい。しかし、この手作り感満載の温かい世界観に今後も磨きをかけていっていただきたい。「温かさ」の中の切なさ寂しさも含めてのことである。

山本正典さんの『あ、カッコンの竹』も面白く読ませてもらった。破綻しても憎めない個性がある。世界中の自死を選ばざるを得なかった精神を病まざるを得なかった人々への鎮魂という大きなテーマの作品だと思うが、それをキッチュに滑稽な手法で描いているのが面白い。「妹はハンドルを握る。兄は何をしているのか、地球人には分からない」というト書きが面白くて何度読んでも大笑いしてしまう。役者が実際にどんな動きをしたのか？上演を観たい。人は誰も自分の肉を食って生きている。「自分の生きてきた味がどんなのかは 気になるわ」凄い台詞である。これもいつか使わせていただきたい台詞だ。勿論許可を取りますが。次作が本当に気になります。

最後にくるみざわしんさんの『同郷同年』です。何作かくるみざわさんの作品を読ませていただき、確実に腕を上げたなあ、と感心し感動した。登場人物が三人しかいない中で、時代や季節、状況や切迫感がリアルに迫り、それでいてファンタジーの広さ豊かさも含んでいる。イプセンの『民衆の敵』より日本人には分かりやすく胸を打つのでは？と思ったほどであった。

私は福島原発事故の二年前、ドラマのロケでいわきの旅館に泊まったことがあった。その時に近辺の主婦たちに「福島原発が東京の人たちのために電気を作っているのを知ってますか？もし事故でも起きたらたまったものではありません。自分たちが使わない電気を送って自分たちが犠牲になるのは我慢できません。なんとか渡辺さんから全国にこのことを発信して貰えませんか？」と数人に取り囲まれて訴えられたのだった。それから私自身何もしないままに二年が過ぎて事故になり、私が泊まった近辺は津波でなくなってしまう、実際の被害と風評被害で近隣の農家の方が首を吊ってしまった。後悔しても仕切れない出来事だった。今、切実な緊迫感を持ってあの事故を書いてくれる稀有な作家であると思うし、応援したい。

さて、ここまでが選考の言葉である。

次に今回 25 年で選考を辞退することになった経緯と今の私の心情を書きたい。

戯曲賞 20 年の記念の選考の発表の場で、サプライズで、佐藤信さんと私が、大賞を受賞した歴代の作家たちからの寄せ書きのプレゼントをいただいたのを覚えている人はいるだろうか？

「渡辺さんの言葉で今まで書くことが出来ました。ありがとうございます」などの嬉しい言葉に交じって「姉さん、おっぱい吸わせてえ！」と寄せ書きに書いた作家がいたのだ。そしてその作家は昔から親しいと思い込んでいた内藤裕敬さんだった。私はあまりのショックにその場でこのことがいかに酷い行為でひどい侮辱であるのかを訴えて会場を後にした。翌日仕事があったためである。同じ年月選考してきた佐藤信さんには普通の言葉で労をねぎらい、私には「おっぱい吸わせて」である。女性蔑視も甚だしく、この色紙は第三者に見せることもできない。自分の父親にも母親にも見せることができない。この感情、感覚を分かっていただけだろうか？東京に戻り、他の劇作家たちにその色紙を見せると、女性の劇作家たちは憤慨し、あまりにひどすぎると口を揃えていう。男性作家の反応はまちまちで、同情する人もいるが、笑う人もいる「そういう関係なんだろう」と言う人もいる。そういう関係とはどういう関係なのか？男と女の関係ということなのか？本当にそうなら人前で「おっぱい吸わせて」は間違い沙汰である。

私が本当にショックだったのはこの 20 年、女性一人の選考委員でやってきて、現代日本の女性差別と女性蔑視の問題を必ず伝えながら選考してきたということである。そして、演劇賞の選考委員にいつか女性が半数入る未来を見据えて頑張ってきたということである。

現在では全員男性という選考会もあるのだから、将来は全員女性という日が来るかもしれないが。とにかく女性に頑張ってほしくて今日まで選考委員を辞めずに来たのである。それがあれから五年。毎年、内藤さんと呼んで、発表の場で謝罪してほしいとお願いしても実現できなかったのである。この問題は私一人の問題ではなく、多くの女性劇作家にも起こりうる問題で、みんな泣き寝入りを強いられてきた歴史があるのである。しかし、五年間、私が応援し続けてきた女性劇作家たちからも何の連絡もなく、主催者側からの説明もないまま時間が過ぎて行った。もう辞めるしかないという心情に陥ったのだった。そして、私の所属事務所からもう年末の選考会を多くやると自分の他の仕事ができなくなるとの強い意見を貰い、決意したということなのである。事務所からは辞めるように前から言われ続けてはいたが、私が今まで本当に時間のない大変な時でもやってきた選考だし、皆さんの戯曲を愛していたので続けたいと願ってきたのだった。

昨年の選考会にやっと内藤さんが来てくれて二人で話し、内藤さんが心から謝ってくれたことで二人は和解した。しかし、戯曲賞の主催者や関係者は本当はどう感じているのかは個人で違うだろうと思う。

同情して下さるのはやはり女性たちで、男性たちにとっては私の過剰反応といった解釈なのかもしれない。この戯曲賞に関わる人たちはみんな演劇を愛していて私利私欲のため

にやっているひとなど一人もいない。大阪ガスの方たちも今の時代、必死の思いで支援して下さっていると思う。だからこそ、私がこういう内容を書くのは気が引けるし、泣き寝入りしようと思うところなのである。

内藤さんは大いに反省してくれた。みなさんもこういう事件があったということを心の片隅に置いていただき、そういった男性社会と戦っていた私という人間がいたことを忘れないでいただければ幸いです。これからも少数の人たちの幸せのために弱者の側にたって演劇を作って行きたいと願っています。皆さんも、大変でしょうが、いつまでも仲間を愛し演劇を愛し、書き続けて行って欲しいと願います。今までありがとうございました。

渡辺えり